

中国佛教への道しるべ(三)

横 超 慧 日

研究における専攻の分野を決めて学界人の仲間入りをするようになったら、入門書・概説書を通して広い視野を養うと同時に、それと平行して専門の研究論文に親しむことを忘れてはならない。そこで今回はそうした論文の一般的な状況について少し紹介しておくことにしよう。

周知の如く、現在佛教学に関する全国的な学会としては、日本佛教学会と日本印度学佛教学会とがある。発足したのは日本佛教学会の方が古く、昭和三年に佛教学関係の講座を持つ大学や専門学校が連合して結成されたもので、毎年一回ずつ大会が開かれるが、研究発表者は加盟大学から代表として推された人たちが当るから、その機関誌である「日本佛教学会年報」は発表者数が少く従って比較的長篇が多い。昭和三年に出発した当時は「日本佛教学協会年報」という名であったが、戦後は名を改

め昭和二十四年度の第十五号から「日本佛教学会年報」ということにし、昭和三十九年度の紀要で第三十号に達した。この学会が学校を以て加盟単位としているのに対し、全く個人を以て会員とし会員の研究発表を自由に認めているのが日本印度学佛教学会であり、この方も現在は毎年一回大会を開いて研究紀要「印度学佛教学研究」を刊行している。ただ毎回発表者が百余人の多数に上るため、研究紀要に於ては自然に論文の長さを制限するのを余義なくされている。この会は昭和二十七年に第一巻第一号を発行して以来、既に通算二十七号を発行した。当初は一年に春秋二回大会を開いていたが、昭和三十年以来一年一回ということになった。以上二つの学会は現在尚益々発展を遂げつつあり、強いて得失を云うならば、印度学佛教学会は多くの若い新進学徒に全国的組織の大会

で研究を発表するの機会を与えたことを功績とし、発表者数の多いため力作の大論文を掲載する自由の与えられていないのを遺憾とする。これに対し日本佛教学会の方は各大学の代表者による発表という理由のため、印佛学会の方に比べて比較的長文を以て発表し得る利点があるけれども、ややもすれば宗門大学の代表という立場上からか宗義を展示するに止まり、広い視野に立って鋭く検討しあうという気魄に欠ける憾みがないでもない。然しいずれにもせよ此の二学会が現在の所、日本の全国的な佛教学会として最も大きい組織であることは確かである。

これより前、大正五年から東京帝大の宗教学研究室を中心として、宗教学研究会が雑誌「宗教研究」を発表していた。ところがその雑誌は大正十二年の関東大震災で中絶してしまった。そこで大正十三年九月に至り東京及び京都の両帝大を始め各方面から選定せられた常任委員により「宗教研究」の新第一巻第一号の発刊を見ることになった。隔月発行で一年に六冊出されたので、かなり多くの力作が連載され、宗教研究という題名ではあるがいつも佛教関係の論文が過半数を占めていた。初めは東京の博文館、次いで同文館から発行されることになり、後

に大東出版社の手に移った。この雑誌は昭和十四年から季刊にかわり、日本宗教学会編として世にまみえるに至った。これが昭和の初め佛教学研究に尽した功績の大きいことを忘れることはできない。然しそれはとにかくもとも「宗教研究」という名であって、佛教学専門の研究誌というのではなかった。それが時機の熟したというものか、昭和十二年に至って大東出版社から佛教学研究会発行の隔月刊行「佛教学研究」の誕生を見るに至ったのである。爾来、「季刊宗教研究」にも引きつづき佛教関係の論文が収載せられたけれども、何と云ってもこの方が佛教学研究専門の定期刊物として、昭和十九年の戦火たけなわなる時まで八年間に互って学界に大きな足跡を残してきたのである。毎年一回程度特輯号を出して、「日本佛教の研究」だとか、「我の問題」だとか、「生死の問題」だとかいうような項目がとりあげられ、第五巻の第五・六合併号では「佛教学の現状と将来」を特集し、第六巻の第二・三号では「南方圏の佛教」を特集した。

然るにこの「佛教学研究」が発刊された昭和十二年、奇しくも亦た期を同じうして、支那佛教学研究の専門雑誌が生まれることになった。京都の塚本善隆、高雄義堅、野上

俊静、諏訪義讓、道端良秀、小笠原宣秀、藤野立然等の諸氏と、東京の福井康順、結城令聞、板野長八、山崎宏、龍池清、及び私横超慧日等の諸氏が中心になって、「支那佛教史学」という雑誌を年四回刊行することを決めた。発行所は京都の法蔵館であり、これは昭和十九年十月に第七卷第三号を出すまで続けられた。この雑誌も亦た、「支那浄土教の研究」や、「日支佛教交渉の研究」、「現地踏査報告」等の特輯号を出した外、学界の展望や、支那佛教史学関係の論文目録を附して歓迎せられた。学界の展望として掲載せられたものを挙げてみると、

- 支那佛教史の既刊書概観 昭和十一年（以下十二年、十三年、十四年、十五年）の支那佛教史学界点描
- 支那佛教社会経済史の研究について 遼代佛教に関する研究の発展 儒佛道三教交渉研究の展望
- 五台山佛教の展望 西夏佛教に関する諸研究
- 遼代燕京の佛教 支那佛教初伝に関する諸研究
- 支那禅宗史の展望 金代の佛教に関する研究
- 支那浄土教研究の回顧 支那天台研究の回顧
- 華嚴教学研究の回顧 南方佛教に関する研究の展望

というように初心者向きに各種の解説的文章が載せられ、

又「山西省旅行記」だとか、「山東靈巖寺行」だとか、「五台山紀行」だとか、「河北省正定県城調査手記」だとか、「開封猶太教徒の現状報告」だとか、「泰山に詣ずる記」だとか、「山西太原法華寺遊記」だとか、「北京白雲觀の現況について」だとかいうように旅行記や調査報告も掲載されて仲々興味あるものであった。第七卷第三号の巻末に創刊号以来の既刊本総目録が載っているから参照されたい。この「支那佛教史学」についても一つ付け加えておきたいことがある。それは創刊号から三卷一号までの各号に梁高僧伝の索引を附したことである。梁高僧伝中の僧名、俗人名、寺名、書名等につき原文を抄出した上、支那佛教史研究の重要資料たる出三藏記集や名僧伝抄、弘明集、歴代三宝紀、広弘明集等から関連ある事項を概略採録して参照に資した。これは塚本善隆、龍池清、牧田諦亮の諸氏による努力の成果であり、この方面の研究者に利便を与える所少なくなかった。それは甚だ骨の折れる仕事であるが、続高僧伝にまでこの方法が及ぼし続けられていたならば、更にどんなにか学者に裨益したことであろう。

恐らく「支那佛教史学」の刊行が刺戟をなしたことであろう、遅れること四年にして「日本佛教史学」の刊行

を見ることとなった。創刊号の巻頭に花山信勝氏が、「日本佛教史学の回顧と展望」を書き、末尾の方には書評や彙報や新刊書目、論文一覧の外、附録として毎号、伊藤真徹氏による六国史佛教資料が連載された。これも年四回の刊行で、これは京都の平楽寺書店から発行せられたが、世界大戦の敵しさは終に「支那佛教史学」と同様「日本佛教史学」をも休刊の止むなきに至らせた。

尚一つ中国佛教研究という点から挙げておかねばならぬものに、「日華佛教研究会年報」というものがある。これは日本と中華民国の佛教徒が提携し、相互に研究と親善を図ろうという目的で昭和九年に日華佛教研究会が設立されたのがもとで、昭和十一年にその機関誌として「日華佛教研究会年報第一年」が刊行された。それは現代支那佛教研究特輯号という副題を持つものでも知られるように、支那佛教の現状を知らせることに主眼をおくものであった。中華民国で最近十数年間に出版された諸雑誌の中から佛教関係の論文を分類して集録し、日本に於ての研究についても昭和六年以後最近号までの支那佛教

関係雑誌論文の目録を挙げるとか、その他岩井（牧田）諦亮氏による宋代新訳經典索引目録と、春日礼智氏によ

る全唐文の中の佛教関係撰述目録とが載せられた。今その後の一々を紹介することは略するが、昭和十八年に出した「日華佛教研究会年報第六年」は、談玄氏述の「清代佛教の概況」や、春日礼智氏の筆になる「支那佛教史蹟案内」だとか、「日本現存支那佛教史籍古鈔古刊本目録」というようなものが収められている。春日氏は、同年報の第二年に「全唐詩佛教関係撰述目録」、第三年に「漢代佛教の外典資料」、第四年に「日華佛教交渉年表」、第五年に「宋人集佛教関係撰述目録」というように毎号この方面で労作を発表しておられ、資料集録に尽された努力は全く氏の独壇場であったと言ってよい。

大戦が終つて以後暫くは沈黙し忍苦を続けねばならなかった学界にも、漸く四年を経た昭和廿四年になって佛教史学の方面で再起の動きが高まった。かくて、「日本佛教史学」と「支那佛教史学」の両学界が発展解消し統合したものであるというような意味で、新たに佛教史学会が結成され、平楽寺書店から雑誌「佛教史学」の発行を見るに至った。その名の示すようにこれは、日本だけでなく中国だけでもない。従つて、「佛教印度の地理的考察」だとか、「蒙古語古典文法書に及ぼしたる西藏

佛敎文法學の影響」だとか、「朝鮮における佛敎と民族信仰」だとかいうように、インド、西藏、朝鮮等に関する論文も載るようになった。そして次のような特集号が計画し發表された。

戦後佛敎史學の回顧と展望 禪宗史特集 佛敎
と民衆生活 特集日本浄土敎 日蓮宗特集

日本佛敎の地域發展 説話特集 佛敎美術史特
集

昭和四十一年の二月に第十二卷第三号が出てゐるから、今では創刊以來既に十六年を経過した。然しおおむね日本佛敎に関する論文が優勢で、中国佛敎に関する論文は量的に云つて不振の感を覚えるがどうであらうか。佛敎史學と云つても現象的な面だけでなく教義についての思想的なものをもっと多く出てもよいと思ふけれども、どうも純粹に社会的なものが多い。そして本當は中国の歴史を専攻するものもインドや日本の歴史に關心を持ち、日本の歴史を専攻するものもインドや中国の歴史に注意を払わねばならぬが、仲々そうはゆかず、関連の薄い論文が多いときには自然と読まないで積ん読になり勝ちである。これは私自身の反省から言うことだから、一般にそうでないというなら幸である。

さて以上は佛敎を中心にした雑誌について述べたが、これと關係の深いものに、「東方宗敎」というものがある。東方宗敎というのは、実は道敎學會の機関誌で、道敎學會は昭和二十六年に結成せられ、同年創刊号を發行した。道敎は中国人の生活を考える上に欠くことのできぬ宗敎基盤であつて、その成立發展の上に佛敎との関連は特に深いものがあつた。従つて東洋の宗敎一般との関連に於て研究を進めようとの意図から、その機関誌を道敎研究と名づけないうで、特に「東方宗敎」という名がつけられた。此は法藏館から年四回發行せられるということとで発足したが、その後年三回となり、今では年二回ということになつてゐる。昭和四十年の十月に第二十六号が出た。老莊思想、道敎信仰等が中心となつて論じられてゐることは當然で、實際は中国の佛敎がその底流に於て道敎乃至は道家の思想と密接に相通じたものを以て行われてきたことであるから、とかくものごとを佛敎にだけ特有だと考え勝ちな佛敎學者の考え方は、こういう雑誌の論文から啓發されることが少なくない。例えば日本佛敎を考える時日本民族固有の信仰を無視したり民間の習俗に眼をそらすことができないように、中国の佛敎を考察するに當つても道敎信仰を看却しては真相に迫り得

ないということをお心得ておかねばなるまい。そういう意味で道教の方に従来関心の薄かった私自身甚だ恥しく思っている。東方宗教の中には、道佛二教の交渉や、高僧伝の神異だとか、知名な高僧の思想中にひそむ道教的要素など、佛教と表面的に繋がる論文もある。

以上私は主として佛教を中心とする雑誌について記してきたが、この他に明治時代以後久しく「哲学雑誌」（東大）、「哲学研究」（京大）、「東洋学報」（東洋学術協会）、「史学雑誌」（東大）、「東洋史研究」（京大）、「史学研究」（広島大）、「史林」（京大）、「史淵」（九大）等に佛教関係の論文が夫々哲学的に或は史学的に扱われて掲載され、屢々学界に波紋を起すような出来事もあったが、今はそれに触れることを控えておく。

昭和の初、東方文化学院という中国文化研究の機関があつて、東京と京都に研究所を持ち、その中で中国の佛教も研究せられていた。夫々別に研究成果を発表し、「東方学報東京第何冊」、「東方学報京都第何冊」というように平行して刊行せられた。東京では常盤大定博士の下に結城令聞、中田源次郎、龍池清の諸氏や私などがおり、京都では松本文三郎博士の下に塚本善隆、長尾雅人、

牧田諦亮、藤吉慈海の諸氏がいて佛教関係の論文を発表した。その中、東京は昭和十九年の第十五冊で終りとなり、その後は東京大学の東洋文化研究所に併合され、「東洋文化研究所紀要」の名を以て刊行されるようになった。「東洋文化研究所紀要」は昭和四十一年三月に第四十冊を出したが、佛教研究の専門家が少いたためその方面の論文は近來甚だ少くなった。京都の方では東方文化研究所が京都大学の人文科学研究所に併合された後も、東方学報は依然その名を保存して続刊せられ、昭和三十九年十月には創立三十五周年記念論集として、「東方学報京都第三十六冊」が出された。この方には未だ佛教史関係の論文が屢々発表されて今日に至っている。

尚この他に戦後誕生した東方学会のあることを紹介しておかねばならぬ。東方学会は東方文化の研究に従事する内外の学界人で組織された純学術団体で、羽田博士を会長とし学術公開講演を行っていたが、創立以来五年を経過した昭和二十六年になって機関誌「東方学」第一輯を発行した。昭和四十年十一月で第三十一輯が出ている。「東方学」という名でも知られるように、これは宗教や哲学、文学、考古学を初め政治・経済・地理・言語等文化百般に互る研究論文が載る。従つて佛教に関してもイ

ンド佛教や中国佛教に関する論文もまま発表されること
があるけれどもその範囲が甚だ広い関係上、狭い研究領
域に没頭する者にはとかく見落され勝ちになるのも止む
を得ない。然し「我が東洋学界の近況」と「海外東方学
界の消息」とが殆ど毎号報せられておるし、別に「東方
学論集」というものも出されているから、初心の入門者
にとってよりはむしろ研究の進んだ人々にとって資する
所多いものである。

次に佛教系の大学等から出ている雑誌について書き添
えなければならぬ。

先ず手初めに我が大谷大学から言うならば、現在、「大
谷学報」と、「大谷大学研究年報」とを出している。「大
谷学報」は、創刊された大正九年当時から昭和二年まで
「佛教研究」という名であったが、昭和三年から現在の
「大谷学報」という名に改められた。大谷大学の性格上、
論文の内容が史学・哲学・文学・社会科学等にも互るこ
ともろんであるが、何と言っても真宗学・佛教学に関
するものが重要な部分をなしている。一年に四回の発行
で、昭和四十年三月に第四十四巻第四号が出た。「研究
年報」は名の如く年一回の研究報告で、原則として毎回

佛教学及び真宗学のものが夫々一篇ずつは掲載されるこ
とになっており、昭和十七年に第一集が出て以来、戦後
暫く中絶していた関係もあって、昭和四十年六月に第十
七集を出している。これらの論文の分類総目録が昭和三十
六年に出た。

又龍谷大学では「龍谷大学論集」「仏教学研究」があり、
大正大学には「大正大学学報」がある。大正大学の山家
学会は昭和三十五年から「天台学報」を出しているが、
以前には「山家学報」という名の雑誌で学会から注意を
ひく論文が出されていた。曾つて智山専門学校には「智
山学報」があった。又高野山大学の「密教研究」、立正大
学の「大崎学報」、駒沢大学の「佛教学部研究紀要」、花
園大学の「禅学研究」、愛知学院大学の「禅学研究」、同朋
大学の「同朋学報」がある。その他、京都大学の「イン
ド学試論集」、「駒沢大学研究紀要」、「東洋大学紀要」、「大
正大学研究紀要」、「立正大学研究紀要」、「仏教大学研究
紀要」、「龍谷大学佛教文化研究所紀要」、京都知恩院内佛
教文化研究所の「佛教文化研究」等があり、近くは大坂
四天王寺短大に本部をおく聖徳太子研究会の「聖徳太子
研究」だとか、鈴木学術財団で出されることになった「研
究年報」、東洋大学の東洋学研究所から出た「東洋学研

究」等最近のものまで加えるとおびただしい数に上る。各宗大学の雑誌には夫々古い歴史があり、例えば大谷大学の「無尽燈」、龍谷大学の「六条学報」等さかのぼって紹介すれば今日の雑誌はみな古い伝統を持っているのである。然し今は研究というより全くの入門者にほんのあらましを紹介したに過ぎぬから、この程度で止めておきたい。

最後に、雑誌論文と並んで単行本となっている論文集について一言触れておきたい。個人の著書にはその人の多年の研究を集録した論文集の形態をなすものが少なくないが、その他に記念論文集や総合研究の成果発表といったように多数学者の研究論文を集録して一冊の書物となったものが数多くある。古い所では、「常盤博士還暦記念論叢」（昭和八年、弘文堂二十編）を始とし、「宇井博士還暦記念、印度哲学と佛教の諸問題」（昭和二十六年、岩波書店二十五篇）、「宮本正尊教授還暦記念論文集」（昭和二十九年、三省堂四十七編）、「山口博士還暦記念印度学佛教学論叢」（昭和三十年、法蔵館三十六編）、鈴木大拙博士頌寿記念会刊「佛教と文化」（昭和三十五年、鈴木学術財団十八編）、「福井博士頌寿記念東洋思想論集」（昭和三十五年、同

会五十七編）、「塚本博士頌寿記念佛教史学論集」（昭和三十六年、同会七十九編）、「岩井博士古稀記念典籍論集」（昭和三十八年、同会百一篇）、「干潟博士古稀記念論文集」（昭和三十九年、同会四十編）、「結城教授頌寿記念佛教思想史論集」（昭和三十九年、大蔵出版社五十三篇）、等がある。まだ洩れているものや目下編集中のものもあるであろう。四・五十篇から百篇にも上るといふ多数になれば当然内容上四部か五部に分けられ、中国佛教関係のものはその中にまとめられている。そしてそれら頌寿記念の論文集は必ず初にその学者の業績を列挙しているから、そういうものを見ておくということも、若い後進にとってよき指針を与えることになる。次に特定個人の頌寿記念とは別に、東京帝国大学では宗教学講座が創設された二十五周年の記念に「宗教学論集」（昭和五年、同文館二十一篇）を出し、又昭和九年には釈尊の生誕二千五百年を記念する祝典が挙げられたので、同記念学会により「佛教学の諸問題」（昭和十年、岩波書店五十四篇）が刊行された。共に当時に於ける日本の佛教学界の最高水準を代表する論文として、今日の学界と比較し傾向の相違や進歩の跡等を考えてみるのも興味あることであろう。その他先年は慈覚大師円仁の示寂一千百年を記念し、福井康順氏により

「慈覚大師研究」(昭和三十九年、天台学会四十五篇)が刊行せられた。円仁は日本の人であるが、入唐求法巡礼行記の著者として、中国佛教研究者の注意を引く所大きく、従ってその関係の論文が多く収められている。又塚本善隆氏編の「肇論研究」(昭和三十年、法蔵館七篇)や木村英一氏編の「慧遠研究」(遺文篇と研究篇(昭和三十年、三十五年創文社十四篇)、坂本幸男氏編「法華経の思想と文化」(昭和四十年、平楽寺書店二十五篇)、中村元氏編「華嚴思想」(昭和三十五年、法蔵館九編)等の如きは、論文集とは言っても一つのテーマを共同して総合的に研究したものである。多くの学者が夫々専門の立場から多角的に研究し集積するということが、近年の傾向とも言えるであろう。今後はそういうものを通して、ややもすれば小さい殻に閉じこもり勝ちな学者の弊を矯めてゆくように心がけるべきではなからうか。

「中国仏教への道しるべ」という題で、思いつくままに三回連続して入門者への手引きと思われるようなことを書いてみた。手引きとは言っても、僅かに寓目した若干の参考書を列挙したり、自分の通ってきた道をふり返ってこうあるべきだと日頃感じているようなことを書き綴ったに過ぎない。実を言えば、中国仏教研究の近代史

から書き始めて、先人の業績を顕彰し、発達の顕著な分野と著しく遅れ若しくは忘れられ勝ちな分野とを識別し、今後の進むべき方向についても見通しを述べねばならなかった。又ともすれば護教的立場と歴史学の批判的立場とを混同し易い傾向にあるこの学問に対して、どのような基本的態度を用意してかかるべきか、そういうことについても若干の私見を披瀝すべきはずであった。更に中国仏教に対する欧米や中国に於ての研究については全然触れなかったが、フランスを初めヨーロッパの学者がこの方面に貢献した学者は少なくない。前号で安藤教授が紹介されたアメリカのハーヴィッツ博士やオランダのツェルヘル氏のように、日本人や、中国人・欧米人の研究をも涉獵してすばらしい成果を挙げている最近の学者もある。中国の東洋学関係の雑誌や仏教に好意的な思想史家の紹介も、必須とは考えながら省略してしまった。それは全くの初歩的入門者のためとだけ念頭においた為で、幼稚な手引きをしたのに止まる。私自身の見聞が浅いため、偏ったり書き漏したり進んだ学界の現況を書けなかった点の多いことは重々承知しているが、斯学に進もうと志す方々に些かでも参考となり得たならば幸いと思ひ、一先ずこれでこの稿を了ることにする。